

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年

3

マンガ家への道



ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日(金)から29日(日)の会期で開催しました。新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

おやしマンガ同人誌

つれづれ草 **マンガ展**

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年



入場：無料

おやしマンガ同人誌「新つれづれ草」の山下幸雄は1970年少年ジャンプから篠原幸雄としてマンガ家デビューその後、マンガ家、デザイナー、編集者としての立場を変えながらマンガとの関わりを持ち続けて生きてきた。そして今再び、やましたゆきおとしてマンガを描き始めた！

イラスト：篠原幸雄
(著者少年ジャンプと週刊少年マガジンの大五)

日時：10月20日(金)～10月29日(日)
午前9時より午後9時まで(最終日は午後5時まで)

会場：森下文化センター1F展示ロビー
お問合せ：森下文化センター
〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17
TEL03-5600-8666 FAX03-5600-8677
都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分
都営大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分
<http://www.kcf.or.jp/>

主催・新つれづれ草 共催・森下文化センター





3、マンガ家への道

中学の時に始めた「つれづれ草」は高校を卒業する頃まで続きました。

マンガの持ち込みを始めたのは、高校二年ぐらいからです。行ったのは集英社と秋田書店、それに少年画報社と青林堂。集英社では「少年ブック」の編集者の角南攻さんのお世話になりました。「少年ジャンプ」の『トイレット博士』のスナミ先生のモデルになった人です。

その頃は新人編集者だったので、「少年ブック」の読者コーナーを担当していたんです。その書き文字を発注してくれました。秋田書店では、単行本の部署でカットの仕事をもりました。釣りの入門書で、魚の絵を描きました。僕は絵が下手だったんで、そんな僕でもできそうな仕事をまわしてもらいました。ギャラもいくらかいた দিয়ে。優

しいですよ。

そのままプロになることは信じて疑わなかったです。なので、大学なんかに行くつもりはなかった。でも親が不安だったので、東京デザイナー学院のグラフィックデザイン科に入りました。マンガで食えなかったら、デザインで食いなさいという親心ですね。でも、当時は七〇年安保の真っ只中で、学校はバリケード封鎖されるわ、授業もないわで一学期でやめちゃいました。



ダイナミックプロでアシスタントを

そんな時に、角南さんから永井豪先生のダイナミックプロでアシスタントを探しているから、お前やらなかと誘われたんですよ。もちろん二つ返事で行きました。高校を出た年ですから、19歳のときですね。

永井先生は『ハレンチ学園』や『あぼしり一家』を連載していた頃で、僕がなぜ呼ばれたかというところ、ダイナミックプロにいた小山田つとむさんが「少年サンデー」で連載することになり、そのアシスタントが必要だったからです。ベタ塗りをおもにやっていたね。時間が空いたら永井先生のお手伝いもしました。徹夜で原稿を仕上げ、近所の居酒屋で朝食セットみたいなものを食べて解散。それでまた昼過ぎに集まって作業、という生活でした。ダイナミックから見ると、僕は集英社から回された若造、という感じだったと思います。永井先生とはそんなに会話はしなかったかな。朝飯をみんなで食べに行ったときに話したぐらいでした。



デビュー作『悪魔の水』

「週刊少年ジャンプ」1970年第38〜40号（集英社刊）

その頃、神保町の古本屋で新潟のイタイイタイ病の本を見つけて、角南さんにこれをマンガにしたいと言ったんです。その本はイタイイタイ病を告発したお医者さんの手記でした。

企画が通ったので、その年の12月にダイナミックプロを辞めました。そしてイタイイタイ病のマンガに専念するわけです。それが『悪魔の水』。デビュー作です。僕はストーリーマンが派でした。テーマありきでマンガを描いていましたから。そういう意味で公害問題はとっつきやすかった。「ジャンプ」としても、中沢啓治の『はだしのゲン』がヒットして、その路線を続けたかったんだと思います。



悪魔の水（週刊少年ジャンプ集英社発行
1970年38号39号40号連載）



マンガを
描くことに
専念する
様になった



その年の暮れに
アルバイトをやめて

それを原案にした企画が
ジャンプで通り…



神保町の古本屋で
イタイイタイ病との
戦いを書いた手記を
見つけ…

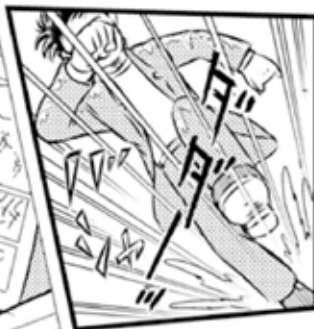


何度も何度も
描き直しを
繰り返し…

翌年の
十月に
やっと…



工場廃液の
カドミウムが
原因の公害病
イタイイタイ病



一人の医師と
子供たちの
闘いを描いた
公害告発マンガ
「悪魔の水」は

完成した!

実際、描き始めたわけですけど、それはもう大変でした。計90ページで三回の連載だったんですが、その十倍ぐらいのネームを描きました。

角南さんからは、ほとんど全部のコマに注文をつけられました。「人と人が喋るときに、この位置関係はないだろう」「このキャラクターは本当にこんな性格でいいのか」「ここでなぜ裁ち切りを使わないんだ」といった、ストーリー作りからセリフ、マンガのテクニックにいたるまで本当に細かく指導されました。

おかげでボロボロになりました。本当に力尽きたというか。描き上げたあと、しばらく集英社に行かなかったぐらいですから。もちろん角南さんは僕にマンガのイロハを一から教えるよと思っていたわけで、その意味では感謝していますし、すぐくためになったんです。

文・新つれづれ草第7号掲載「つれづれインタビューマンガびと」より抜粋加筆



「週刊少年ジャンプ」1970年第38～40号(集英社刊)に掲載されたデビュー作『悪魔の水』

秋田書店と集英社の間で

そのあと秋田書店で編集者の阿久津邦彦さんが僕の担当になって「まんが王」や「冒険王」で何本か描かせてもらいました。彼は角南さんとはまったく逆で、何を描いても受け取ってくれました。そういう意味でストレスが発散できたので、また角南さんと一緒に描くことができるようになったんです。『つそつき』という交通事故をテーマにしたオリジナルのマンガを30ページぐらい描いて、その次に『いのちの契約書』。これは水俣病をテーマにしたマンガです。53ページほど描きましたが、これまた大変な思いをして、最後に出稼ぎをテーマにした読み切り『雪どけの詩』を描いて、もう二度と「ジャンプ」では描かないと勝手に喧嘩別れみたいになってしまいました。

少年ジャンプで描いた4作は、『悪魔の水』（イ

タイタイ病）『つそつき』（交通戦争）『命の契約書』（水俣病）『雪どけの詩』（出稼ぎ）と、当時の社会問題を取り上げ、子どもの視線から問題提起しようとした作品で、今考えると、私の希望通りのマンガを描かせてもらっていた訳で、ジャンプで続けられなかったのは、わたしの弱さからだったと思っています。



いのちの契約
(週刊少年ジャンプ 1972年 37号)

角南さんが届けてくれた、 長野編集長最後のメッセージ

数年前に、ここ森下文化センターで開催した「新つれづれ草・マンガトークショー」に、30年ぶりで突然現れた角南さんは、初代少年ジャンプ編集長の長野規氏の最後のメッセージを、私に届けて来てくれたのでした。

その後、角南さんから改めていただいた手紙には…

…それともう10年前ですが、初代長野規編集長が、死の一週間前に病室で「スナミイ、篠原くんのイタイタイ病は良かったなア…。あれこそが、友情努力勝利。少年ジャンプが他誌と違う理想の漫画だ」と語ってくれたこと…。それを伝えられただけで、ホッとしました。

…と、書いてくださいました。